

震生湖誕生100周年記念事業
はだの歴史博物館 企画展

震生湖 保存と活用の歩み

令和5年7月15日(土)～9月24日(日)



震生湖の湖畔に佇む二人の紳士 昭和初期

はじめに

令和3(2021)年3月26日、本市と足柄上郡中井町にまたがって存在する震生湖が国登録文化財となりました。

震生湖は、100年前の大正12(1923)年に発生した関東地震でできた、せき止め湖です。当時、地震によって関東地方の多くの場所で崖崩れが起きましたが、今もその痕跡が残っている所はほとんどありません。

震生湖では、せき止められた場所が沢の最上流部であったため、決壊することなく当時の姿を保ち、今でも「湖面」「崩落地」「堰止地」を一体として見るすることができます。

秦野を代表する観光地として人々に親しまれてきましたが、誕生100年を機に、震生湖をめぐるこれまでの取り組みを振り返ってみることとします。

誕生と命名

震生湖を誕生させた崖の崩落は、中村川支流の藤沢川最上流部、市木沢南斜面で発生した、約 250m にわたる大規模なものでした。

周辺では複数の土砂崩れが発生しており、震生湖北西の峯坂で発生した土砂崩れでは、地震発生当時下校中だった南秦野尋常高等小学校の 2 人の少女が遭難し、坂上の台地上には大正 13 (1924) 年 10 月に、「大震災埋没者供養塔」が建立されています。

地すべりが発生した当初、地元では大陥没による地形変動と受け止め「陥没地」、「陥没池」などと呼んでいました。



誕生直後の震生湖 大正 14(1924)年

「震生湖」という名は、大正 13 (1924) 年頃に地元有志が地域資源として活用しようとして命名したもので、「供楽会」という名の会を結成して湖に魚を放って釣魚大会を催したりしています。

寺田寅彦の来訪

東京帝国大学地震研究所の寺田寅

彦は、昭和 5 (1930) 年 9 月 7 日と 12 日と、二度にわたって震生湖を訪れています。7 日は下見で、写真だけ撮って帰りましたが、12 日は若手の同僚である宮部直巳と津屋弘達を伴い現地の測量も行ないました。

寺田は、宮部直巳との連名で「秦野に於ける山崩」というレポートを『東京大学地震研究所彙報』第 10 号第 1 冊に発表します。なお、このレポートでは「震生湖」の名称は使われていません。

寺田は物理学者でしたが、夏目漱石を師とする俳人でもあり、漱石の『吾輩は猫である』の登場人物の一人「寒月先生」のモデルになっています。

震生湖を訪れた際に寺田は、漱石同門の松根豊次郎（東洋城）に絵葉書を出しますが、そこには次の一句が書かれていました。

「南秦野の丘陵にて

蕎麦陸穂丸い山越す秋の風」

また、翌月に発行された松根が主宰する俳句雑誌『渋柿』には「寅日子」の筆名で「震生湖より」という文章が発表されており、「山裂けて成しける池や水すまし」「穂芒や地震に裂けたる山の腹」の二句が詠まれています。



俳句雑誌『渋柿』「震生湖より」昭和 5(1930)年

なお、「穂芒や」の句の「地震」にはのちに「ない」とルビが振られます。

震生湖の湖畔には「山裂けて」の句碑が建っていますが、これは寺田の友人の小宮豊隆が揮毫し、昭和 30 (1955) 年 9 月 1 日に建設披露式を行なったものです。



建碑間もない頃の寺田寅彦句碑 昭和 30(1955)年

「穂芒や」の句碑は本町小学校に阪神淡路大震災の起きた翌月にあたる平成 7 (1995) 年 2 月に建碑され、「蕎麦陸穂」の句碑は、「南はだの村七福神と鶴亀めぐりの会」によって令和 4(2022)年 9 月 7 日に「大震災埋没者供養塔」のある地に建碑されています。



本町小学校の句碑建碑 平成 7(1995)年 2 月 28 日

観光地として

昭和 30 年代前半までは、市内に泳げる川やプールがなかったので遊泳

者も多かったのですが、湖底に立木が残り水の循環が悪く水難事故が多いため、昭和 36(1961)年頃から遊泳禁止となり、弁天堂が設置されるなど、観光地としての整備が進められました。



整備が進む震生湖 昭和 36(1961)年

昭和 40 年代にはボート遊びをする家族連れや釣り客なども多くみられ、観光写真コンクールでは定番の撮影スポットとなっていました。



震生湖で楽しむ人達 昭和 46(1971)年

昭和 44(1969)年には市内の弘法山と共に大規模な観光開発計画が立案され、弘法山震生湖地域観光協議会が企画し、財団法人日本観光協会が実施した調査結果に基づき、昭和 46(1971)年に『秦野市弘法山・震生湖地域観光調査報告書』が作成されました。

その報告書では水禽類を中心とした水上動物園の性格を持つ都市公園とする計画として位置づけられてい

ましたが実現には至りませんでした。

以後は、釣り場としての観光開発が進み、コイやヘラブナ等の放流が盛んに行われるようになっていきます。



ヘラブナの放流 昭和 50(1975)年

震生湖の研究

震生湖については、これまでに各分野にわたる複数のレポートや調査報告書が公にされています。

昭和 41(1966)年には東海大学海洋学研究会により、地質、測量・計測、生物の分野から総合的な調査が実施されているほか、昭和 61(1986)年には、秦野市内の学校教員を主体とした秦野自然誌研究会による「地質と水質」、「植物」、「動物」の分野から調査が行われ、『秦野市史自然調査報告書 3 秦野の自然Ⅲ—震生湖の自然—』として昭和 62(1987)年に秦野市から発行されています。

近年では、平成 29(2017)年に「1923年関東地震による震生湖地すべりの

地質構造とその意義」が 4 人の研究者の連名で『京都大学防災研究所年報』第 60 号 B に発表されます。

この論文では、ボーリング調査の結果によって、震生湖を誕生させた崩落の内部構造について、地表から 17m 程度の深さにある約 6.6 万年前に堆積した東京軽石層にすべり面があり、その上部の火山灰土と火砕流堆積物がすべったものであるとしています。

国登録文化財として

震生湖は、幾度かにわたる観光開発の波を受けているものの、近年撮影された航空写真と、寺田らが昭和 5 年(1930)に作成した平面図を見比べると、堰止地の表面がならされたことを除いては、水源や崖の崩落部分など旧状を良くとどめています。

東日本大震災以降、震災に係る遺構が注目される中で、震生湖は全国的に稀な現存する地震による堰止湖として評価され、地域の方々の御理解と御協力をいただき、令和 3(2021)年 3 月に国登録文化財として登録されました。

今年の誕生 100 周年は、一つの節目として、今後も長く「防災・減災の教材」として震生湖を未来に引き継いで行くべきでしょう。

発行 令和5年7月15日

編集 〒259-1304 神奈川県秦野市堀山下 380-3

はだの歴史博物館 Tel. 0463-87-5542 FAX 0463-87-5794